

少年サッカーチームにおけるスポーツ外傷・障害の調査 —保護者アンケートによる調査—

○茨木 一行^(MD) (いばらき かずゆき), 松下 雄彦^(MD), 中西 雄太^(MD), 山本 哲也^(MD),
山下 貴大^(MD), 寛島 佑史^(MD), 宮地 伸晃^(MD), 田中 聡一^(MD), 荒木 大輔^(MD),
星野 祐一^(MD), 神崎 至幸^(MD), 黒田 良祐^(MD)

神戸大学大学院 整形外科

【はじめに】

成長期サッカー競技者におけるスポーツ傷害の報告は散見されるが、本邦における実態は明らかではない。少年サッカーの普及に伴い、過度の練習や競技開始時期の低年齢化も認められ、より詳細な傷害実態調査が必要と考えられる。

【目的】

本研究の目的は、少年サッカーチームにおけるスポーツ外傷及び障害の実態を調査し検討することである。

【対象と方法】

ある少年サッカー1チームにおいて、保護者から賛同を得られた42人を対象にアンケート調査を施行した。対象者は男性41人女性1人、平均年齢9.6歳であった。サッカー活動状況、プレー環境、疼痛の有無、外傷・障害に関するアンケートを配布し、回収されたデータを検討した。

【結果】

全体の71% (30人) がサッカーに関する疼痛を抱えていたが、そのうちの90% (27人) は疼痛を我慢してプレーを継続していた。疼痛発生113件中、下肢は110件 (97%) でそのうち足部足関節が62件 (55%) であった。外傷に関しては部位別では下肢が75%と最も多く、種類別では打撲が46%で最も多く次いで捻挫が29%と多かった。骨折を5件みとめ、その内4件が上肢の骨折であった。17人が病院受診していたが、外傷以外の疼痛により病院を受診したのはそのうち6人 (35%) であった。病院で診断された障害は膝OCD 2件、フットボラーズアングル 2件、腓骨筋腱障害1件、overuse 1件であった。

【考察】

7割の児童が何らかのサッカーに関する疼痛を自覚しながらも9割は我慢しながらプレーを継続していた。外傷による病院受診が多く、特定の受傷原因がない場合は病院受診をしない傾向があった。非外傷例では膝OCDの様な重篤な病態もあり、疼痛を自覚した場合は早期に病院受診した方が良いことが示唆された。